

「キリストの苦しみ、その意味」(Iペトロ三章一三〜一八節)

## 1 一路十字架へ

三月二日からはじまった受難節(レント)、今日からその最後の一週間、受難週になります。今週の金曜日が受難日、イエス・キリストが十字架につけられた日。その三日後の来週の日曜日が復活日(イースター)です。

福音書が伝えるこの一週間の出来事を、改めて振り返ってみれば、次のようになります。

この一週間は、イエスが都エルサレムに入城してはじまります。詳しくいえば、その日は、逾越祭の五日前です(ヨハネ一二・一二)。

イエスはエルサレムに歓呼して迎えられます。少し細かいえば、マタイ、マルコ、ルカの各福音書は、この群衆を、イエスと共に祭りにやってきた巡礼者たちとして描いています。これに対してヨハネによる福音書は、すでに祭りに来ていた大勢の人が、イエスがエルサレムに来ると聞いて、迎えに出たとして描いています。その違いはあります。

非常に興味深いのは、また重要なのは、エルサレムに入ってそのまま向かった先がエルサレム神殿であったことです。

この行動に、イエスの思いの本質を見るような気がいたします。というのも、イエスはこの都エルサレムで何か世俗の権力を得ようとしたわけではありませんでした。そうではなくて、イスラエルが、まことの神の民として歩むこと、そのために悔い改めることを願っていたのです。その意味で、ガリラヤからエルサレムへ、主イエスのメッセージも、歩みも一貫していたといっているのではないのでしょうか。

しかしそのイエスの目に映ったのは、そうした彼の願いとはほど遠い世界でありました。神殿の境内にイエスが入るやいなや、そこで商売をしていた人々を追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返した、イエスの激しい行動を、皆さんも覚えていらつしやると思います。

「両替人」にしても「鳩を売る者」にしても、神殿の礼拝には欠かせない人たちです。しかしそれを追い払う。それは、いま神殿でおこなわれていることへの激しい抗議であったのです。

さてイエスが捕らえられたのは木曜日の夜です。その間、数日ですが、イエスは神殿の境内で人々に教えて過ごしていました。神の国の福音を、ここでも、宣べ伝えていたのです。ただここでの宣教は、ガリラヤや、エルサレムまでの間とは違って、しばしば論争や問答に発展したのです。確かにそこは、祭司長、長老、そして律法学者たちフアリサイ派、宗教的なエリートたちの本拠地であったのです。

こうしたエルサレムでの何日かの生活、イエスは、夜の、近くのベタニア村などに退き、翌朝早く、神殿の境内に来て教える、というような生活をしていました。弟子たちも一緒です。

そうした中で、イエスに敵対する側の思いは、イエスを殺害してしまうということこ

るまで、急速に高まっていきます。こうしてイエスが捕縛されたのが、木曜日の夜であつたのです。

その日の夕方、イエスは弟子たちと共に、過越の食事をしていきます。最後の晩餐でもありました。それが終わって「一同は賛美の歌をうたつてから」（マルコ一四・二六）オリーブ山の中腹ゲツセマネという所に行きます。そこでイエスが最後の祈りをささげます。それが終わるか終わらないうちに、十二人の弟子の一人イスカリオテのユダを先頭にイエスをとらえようと一団がやってきます。

その夜イエスはユダヤの宗教裁判にかけられます。夜通しなされています。何度か連れ回されます。明け方、金曜日ですが、イエスはユダヤの最高法院からローマ総督ピラトに訴えられます。裁判が開かれます。ピラトはイエスに罪を認めなかった。にもかかわらず、イエスを無罪放免することはありませんでした。彼は民の声に迎合し、イエスの十字架刑を決定し、公正たるべき裁判官としての自らの務めを放棄したのです。十字架につけられたのは午前九時、息を引き取つたのは午後三時、夕方、遺体はアリマタヤのヨセフの手で引き降ろされます。

## 2 イエスとペトロ

さて今日、私どもに与えられた聖書の言葉はペトロの手紙です。ペトロは、いうまでもなくイエスの弟子、イエスがもつとも信頼を寄せた、イエスより年長であり、弟子を代表する人でした。

このペトロを、いま私が少し申し上げたイエスの受難の出来事の中に、組み込むとすれば、どうなるのでしょうか。実際、イエスの受難、十字架への道行きに弟子たちもいつも一緒だつたのです。

ペトロについていえば、イスカリオテのユダに率いられた一団が、イエスをとらえにやってきたとき、彼は、もつていた剣で大祭司の手下に打ちかかり、右の耳を切り落としたということもありました（ヨハネ一八・一〇）。

またオリーブ山、ゲツセマネの園で、イエスが「恐れもだえ」（マルコ一四・三三）祈っている間、目を覚ましておられるようにとのイエスの命令にもかかわらず、ヤコブ、ヨハネと共に眠ってしまったこと、三度も眠ってしまった、イエスの最後の祈りの戦いにあずかることができなかったことも思い起こします。

そして何より、私どもが思い起こすもつとも大きな出来事は、三度にわたって人びとの前でイエスを否認したことです。

木曜日の夜中、イエスが大祭司の館で裁判に立たされていたとき、他の弟子は逃げ去っていたのに、ペトロは館の「中庭」にまで入ります（ヨハネによる福音書では中庭に入ったのは、もともと弟子のヨハネ。彼は大祭司の知り合いで、そのおかげでペトロも中庭に入ることができた。一八・一五以下）。火にあたっていたペトロを、大祭司の女中が、たぶん最初はとくに他意はなく、ふつと気がついたかのように、あなたも、中で裁判を受けているナザレのイエスと一緒にいた、と言つたのです。ペトロは、あなたが何をいつているか分からないと言いつつ、足は出口のほうに向かっています。女中は、今度は周りの人にこの人はイエスの仲間です、と言ひ出します。ペト

ロは打ち消します。すると、居合わせた人たちが、お前の言葉はガリラヤ訛りだ、確かに仲間だということです。マルコによる福音書はこう書いています。

すると、ペトロはのろいの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした（マルコ一四・七一〜七二）。

この後のイエスの十字架の出来事に、ですから、ペトロをはじめとして、弟子たちは不在です。受難の出来事に見え隠れするペトロは、このような失敗と挫折になすべなくたはずんでいます。

ペトロ、また弟子たちは隠れていました。そしてイエスの復活を天使から聞いたマグダラのマリアや、他の婦人たちが、復活を弟子たちらに知らせても、何も「信じなかった」（マルコ一六・一一）とあります。

ルカによる福音書には、ペトロに対する、生前のイエスの言葉として、次のような言葉が残されています。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟を力づけてやりなさい」（二二・三二）。

この言葉通り、ペトロが立ち直ったのは、復活のイエスがペトロに出会ったことによります。最初に出会ってくださったのがペトロでした（Iコリント一五・五）。やがて彼は聖霊の注ぎを、弟子たちと共に経験し、初代教会の担い手として、使徒として、復活の主を宣べ伝え、教会の宣教の時代を切り開いていくこととなります。ペトロは生まれ変わったのです。

### 3 ただ一度

さて、それから、およそ三十年の歳月が過ぎました。今日の聖書、ペトロの手紙は、彼の晩年の手紙で、三十年にわたる彼の使徒としての歩みを凝縮したものとされています。

三十年たって、教会は、この手紙の書き出しに名前が上がっているような、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアなど、パレスチナから遠く離れたところにも広がっています（一・一）。それは、異邦の国民への伝道の成功を意味します。しかし同時に、この手紙は、早くも組織的な迫害が、それゆえの試練が、それら各地の教会を、またキリストに従う者たちを、襲いはじめたことも明らかにしています（五・八他）。

そしてむしろこの手紙は、そうした中で、すなわち、教会もキリスト者も迫害の試練と苦しみにある中で、神のまことの「恵みにしっかり踏みとどまる」（五・一二）ことを願って記されたものであったのです。

今日の箇所でペトロが勧めるのは、ひとえに、他でもないキリスト・イエスを見つめ、主とせよ、ということ。「心の中でキリストを主とあがめなさい」（一五節）ということなのです。

今日の箇所を読むと、当時の教会、キリスト者が、いろいろの状況に置かれていたことが分かります。

例えば「義のために苦しみを受ける」（一四節）という言葉があります。信仰に基づいて、正しいと考えることを語ったり、行ったりして、後ろ指をさされることがありました。

信仰の希望について「説明を要求する」人もいます。「説明を要求する」というのはこの場合、よい意味で、もつと知りたい、できたら仲間に入りたいたいから説明してほしいという意味ではなさそうです。キリスト教について批判し、詰問してくる人がいるのです。その場合でも、「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい」（一六節）と、ペトロは勧めています。

また教会の、またキリスト者の「善い生活」について、「ののしり」、「悪口」を言う者もいます。

そうした中でペトロは、苦難の中にある教会とキリスト者に、心の中でキリストを主とせよ、その信仰において、キリストを主として、これを模範として歩むことを止めてはならないというのです。むしろこう勧めています。

神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者のために苦しまれたのです（一七〜一八節）。

イエス・キリストは、その苦しみにおいても、模範です。彼は、善を行って苦しんだのであり、正しい方として、正しくない者のために苦しまれたのです。その極みこそが十字架でした。

ここには、「罪のためにただ一度苦しみました」とあります。「罪のために」とはもちろんイエス自身の罪のゆえにということではありません。そうではなくて私どもの罪のためにです。私どもの罪に対する神の裁きを、代わりに受けて、苦しんだのです。それが十字架の死の意味です。それは、本来、罪人である私どもが受けなければならなかったものでした。

それを、私どもに代わって、罪に対する神の裁きを受けて、そのおかげで、私どもの罪はあがなわれ、反対に、神の子イエス・キリストのもっている命、まことの、永遠の命にあずかることが許されたのです。それがイエス・キリストの十字架で起こったことでした。それを啓示したのは、イエスの死人のうちからの甦りでした。神はイエスを死の中に放置なさらなかった、死の中につなぎとめようとす力を打ち破って命へと引き出したのです。それゆえ、十字架の死は、死の力の勝利ではなく、神の勝利であり、人間の救いの宣言でもあったのです。

「ただ一度」という言葉にも注意しなければなりません。なるほど、イエスの死はただ一度です。しかしそれは決定的な「一度」です。罪の贖い、その清めは、すべての人に、イエス以前の人にも、以後の人にも、私にも、あなたにも妥当し、効力をもつのです。それは、ペトロがここで言っているように、私どもを「神のもとへ導くため」（一八節）以外ではありませんでした。

（二二年四月一〇日 受難週）